

抑うつ傾向者とスチューデント・アパシー傾向者の 間にみられる友人関係の取り方の違いについて

遠田将大・河村茂雄

1. 問題と目的

文部科学省（2008）によれば、大学・短期大学進学率は55.3%になり、過去最高となった。高卒者の二人に一人が進学することを考えると、大学・短期大学への進学が一般的な進路として機能するようになってきたといえるだろう。しかし一方で、入学したものの、学生生活を続ける意欲が低下し、長期留年してしまう学生や退学してしまう学生が増えてきていることが指摘されている（笠原，2002）。この中には、日常生活全般に対する意欲が低下し、抑うつになる者や（笠原，2002）、入学してから学業への関心を失いスチューデント・アパシーになる者（鉄島，1993）が少なくない。

抑うつとは、悲哀感や絶望感などを伴う程の深刻で持続的な症状のことをいう（堀野・森，1991）。抑うつ的な人の特徴として、全生活領域から退却をすること（笠原，2002）、「私には魅力がない」「私は不適格者だ」といったように自己評価が非常に否定的であること（Beck，1976）などが明らかにされている。つまり、抑うつ傾向者は、日常生活全般において無気力になっており、自己評価が否定的な状態であることが考えられる。

無気力という点で抑うつと似た症状を示すものにスチューデント・アパシー（以下S・A）がある。S・Aとは、大学生が学業への関心を失い無気力・無感動・無関心になることをいう。S・Aは研究者によって定義にばらつきがある（例えば、笠原，2002；鉄島，1993など）。本研究では鉄島（1993）と同様、一般学生のアパシー傾向を研究の対象とし、S・Aを「精神病の無気力とは異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと」と定義する。笠原（1983）は、S・Aの特徴として、不安や抑うつなどの体験を持たず、自身は日常生活に適応していると感じていること、勉学という本業領域からの部分的退却がみられることなどを挙げている。このことからS・A傾向者は、勉学に対して無気力ではあるが、日常生活に対しては適応意識が強い状態であることが考えられる。

桜井（1995）は、動機づけ喪失志向性尺度によって学習性無力感を測定した結果、動機づけ喪失志向性が強いと無気力な状態にあることを明らかにした。また桜井は、この概念が抑うつに関連しているだけでなく、S・Aと関連している可能性も示唆している。つまり抑うつとS・Aに共通する無気力には、学習性無力感に関連していることが考えられる。学習性無力感とは、自分が何を行ってもその後の結果には何の変化も与えることができないと認知してしまうことによって、無気力になってし

まう現象のことをいう（Seligman, 1975）。そのため学習性無力感に陥ると、努力を必要とする事柄や苦痛を伴う事柄に関して、それが価値のあることであっても避けてしまうようになり、無気力になることが指摘されている（宮田, 1991）。留年や退学をする学生の中には、不本意入学者や学力レベルについていけない者、孤立してしまった者などがいることから（齋藤, 2005）、自分が努力をしても、その後の結果に影響を与えることができないと認知し、学習性無力感を強く感じている学生が多いことが考えられる。

学習性無力感と自尊感情との間には、密接な関連があることが明らかにされている（McFarland & Ross, 1982）。自尊感情とは、自己に対する肯定的な評価感情のことであり、これが高いと自分自身をこれでよいと捉えていることを示している（Rosenberg, 1965）。反対に、低い自尊感情状態は自己拒否・自己不満足を伴い、自分に自信がなく抑うつ傾向が高いことが明らかにされている（鹿内, 1978）。

よって、生活全般において無気力であり自己評価が低いとされている抑うつ傾向者は、動機づけ喪失志向性が高く、かつ自尊感情が低いことが考えられる。一方、勉学に対して部分的に無気力ではあるが自己評価が高いと考えられるS・A傾向者は、動機づけ喪失志向性は抑うつ傾向者と同様に高いが、自尊感情は高いことが考えられる。このことから、抑うつ傾向者とS・A傾向者は、自尊感情と動機づけ喪失志向性によって分けることができると考えられる。そこで、本研究では自尊感情と動機づけ喪失志向性の2軸を用いて、4群を作成した。自尊感情が高く動機づけ喪失志向性が高い群をS・A傾向群、自尊感情が低く動機づけ喪失志向性が高い群を抑うつ傾向群、自尊感情が高く動機づけ喪失志向性が低い群を充実群、自尊感情が低く動機づけ喪失志向性が低い群を葛藤群として、4群それぞれに名前をつけた。

岡田（1995, 1999, 2002）は、現代青年の友人関係が以前と比べて変化してきていることを明らかにしている。岡田は、現代青年の友人関係は、友人との間において親密で内面を開示するような関わりを行う「内面的関係」のみではなく、活動的で表面的な楽しさを求める「群れ」や互いの内面に踏み込まないように気を遣いながら関わる「気遣い」などが存在することを指摘している。S・Aは軽いノリの人間関係を求め、他者と悩みを共有することを避ける傾向があること（下山, 1997）、抑うつは自身の内面や対人関係に深く思い悩んでいること（堀井・小川, 1997）から、S・Aと抑うつとは、友人関係への関わり方が異なることが考えられる。しかし、こうした指摘は聞き取り調査に基づいたものであり（例えば、笠原, 2002；下山, 1997 など）、量的な検証はされていない。そこで本研究では、自尊感情と動機づけ喪失志向性の2軸によって生じた4群のうち、S・A傾向群と抑うつ傾向群では、友人との関わり方が異なっているのか、また異なっているのであればどのような関わり方をしているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

<調査時期>

調査は、2008年7月から9月に行った。

<調査方法>

A県内の公立大学の大学生の1学年から4学年200名（男子47名、女子153名）を対象に、性別、年齢、学年、学科を記入してもらい、自尊感情尺度、動機づけ喪失志向性尺度（日本語版一般因果律志向性尺度の下位尺度）、友人関係尺度について解答を依頼した。

<使用した尺度>

調査対象の大学生に自尊感情尺度（Rosenberg, 1965）、日本語版一般因果律志向性尺度の下位尺度である動機づけ喪失志向性尺度（桜井, 1995）、友人関係尺度（岡田, 1999）を使用した。

自尊感情尺度は、Rosenberg（1965）が作成したものを山本・松井・山成（1982）が邦訳した全10項目を使用した。この尺度は自尊感情の高低を測定するものであり、5件法（5：当てはまる～1：当てはまらない）を用いて回答を求めた。

動機づけ喪失志向性尺度は、Deci & Ryan（1985）が作成した一般因果律志向性尺度を桜井（1997）が邦訳したものの中から、動機づけ喪失志向性に関する全12項目を使用した。動機づけ喪失志向性は動機づけのエネルギーが欠乏している程度を測定するもので、学習性無力感（Seligman, 1975）と関連がある概念である。なお4件法（4：よく当てはまる～1：全く当てはまらない）を用いて回答を求めた。

友人関係尺度（岡田, 1999）は全15項目であり、友達に心を打ち明けるなどの「内面的関係」5項目、仲間で一緒にいることが多いなどの「群れ」5項目、友達の考えていることに気をつかうなどの「気遣い」5項目からなる。この尺度は友人関係の取り方の違いを測定するものであり、6件法（6：非常に当てはまる～1：全く当てはまらない）を用いて回答を求めた。

3. 結 果

本研究の有効回答は195名であり、有効回答率は97.5%であった。

(1) 因子分析

自尊感情尺度については、先行研究に基づき因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、固有値1以上の因子が1つ抽出された。なお項目8の因子負荷量が.03であったため、それを除いた9項目を自尊感情得点とした。また α 係数は.88と高く、因子の内的整合性が認められた。

動機づけ喪失志向性尺度については、先行研究に基づき因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、固有値1以上の因子が1つ抽出された。なお項目4の因子負荷量が.08と低かったため、それを除いた11項目を動機づけ喪失志向性得点とした。また α 係数は.78と高く、因子の内的整合性が認められた。

友人関係尺度については、岡田（1999）において、内的整合性を確認するための α 係数が .57 ～ .87 という値が得られている。先行研究においても気遣い因子の α 係数は .57 とやや低いが、先行研究でも使用しているため、本研究においても先行研究に従って 3 因子構造として得点を算出した。

（2）動機づけ喪失志向性と自尊感情を用いた 4 群分け

「動機づけ喪失志向性」の 11 項目の合計点と、「自尊感情」の 9 項目の合計点の相関を検討したところ、弱い負の相関がみられたが相関係数の値は低かった（ $r = -.30$ ）。そのため、これら 2 軸を互いの平均点（動機づけ喪失志向性； $M = 30.13$, $SD = 7.33$, 自尊感情； $M = 21.78$, $SD = 5.46$ ）で組み合わせ、以下の 4 類型を設定した（Figure 1）。

1. S・A 傾向群：動機づけ喪失志向性が高く、自尊感情が高い群
2. 抑うつ傾向群：動機づけ喪失志向性が高く、自尊感情が低い群
3. 充実群：動機づけ喪失志向性が低く、自尊感情が高い群
4. 葛藤群：動機づけ喪失志向性が低く、自尊感情が低い群

（3）動機づけ喪失志向性—自尊感情による類型と友人関係との関連

動機づけ喪失志向性—自尊感情による 4 類型を独立変数、友人関係を従属変数として分散分析を行った。その結果、有意な差がみられた（「内面的関係」； $F = 3.29$, $p < .01$, 「群れ」； $F = 2.45$, $p < .01$, 「気遣い」； $F = 2.00$, $n.s.$ ）。そのため Fisher の PLSD 法による多重比較を行った。その結果、「内面的関係」では充実群が抑うつ傾向群、葛藤群より有意に高く、「群れ」では S・A 傾向群が抑うつ傾向群、充実群、葛藤群より有意に高かった。また「気遣い」では S・A 傾向群、葛藤群が抑うつ傾向群より有意に高かった（Table 1）（Figure 2）。

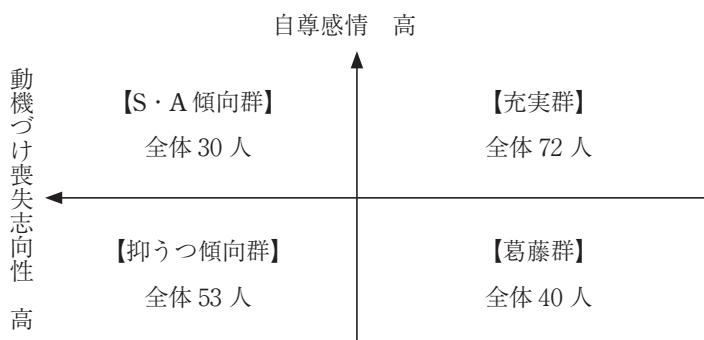


Figure 1 動機づけ喪失志向性と自尊感情における 4 類型の各名称および人数

Table 1 各群の友人関係のとり方の得点の平均値と標準偏差及び F 値

	S・A 傾向群 ($n = 30$)	充実群 ($n = 72$)	抑うつ傾向群 ($n = 53$)	葛藤群 ($n = 40$)	F 値	多重比較 (5%水準)
内面的関係	49.34 (9.76)	52.76 (10.25)	47.41 (7.90)	48.97 (11.42)	3.29**	充実>葛藤, 抑うつ
群れ	54.48 (9.50)	49.10 (9.29)	48.95 (9.51)	49.65 (11.69)	2.45**	S・A>葛藤, 充実, 抑うつ
気遣い	51.84 (10.88)	49.31 (8.98)	48.02 (10.90)	52.49 (9.57)	2.00n.s.	葛藤, S・A>抑うつ

() 内は標準偏差. *** $p < .001$, ** $p < .01$.

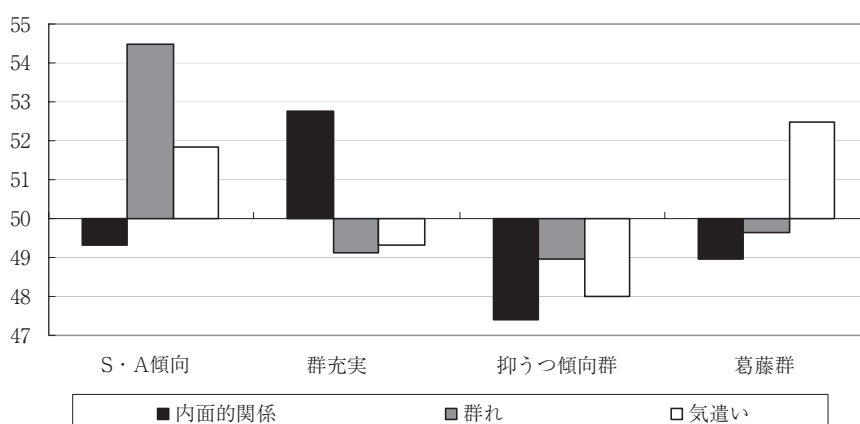


Figure 2 各群の友人関係の下位尺度の標準得点

4. 考 察

動機づけ喪失志向性—自尊感情の4類型と友人関係の取り方の関連について、以下に考察をする。

充実群：動機づけ喪失志向性が低く、自尊感情が高い

充実群では、「内面的関係」が他の群に比べ有意に高く、群れがS・A傾向群より有意に低いことが明らかになった。つまり充実群では他の群に比べて、「内面的関係」が高いことが明らかとなった。「内面的関係」を指向する者は、友人と親密で内面を開示するような関わりをすることから（岡田，2007），この群では、友人と親しい関わりをする中で、相互的に自己開示が行われていることが考えられる。またこのような関わりは、社会的スキルを学ぶ機会となること（松井，1990）や自我同一性の獲得を促進することが指摘されている（Waterman，1993）。よって、充実群の友人関係は、社会的スキルを学習する場や自我同一性の確立が促進される場として機能している可能性が示唆された。

抑うつ傾向群：動機づけ喪失志向性が高く、自尊感情が低い

抑うつ傾向群では、「内面的関係」や「群れ」、「気遣い」の全てが他の3群よりも有意に低いこと

が明らかになった。よって、抑うつ傾向群では、他の群に比べて友人との関わりそのものが希薄であることが考えられる。

S・A 傾向群：動機づけ喪失志向性が高く、自尊感情が高い

S・A 傾向群では、「群れ」と「気遣い」が他の群に比べ有意に高いことが明らかになった。よって、この群では友人関係が「群れ」と「気遣い」によって行われていることが明らかとなった。岡田（1999, 2002）は、「群れ」を指向する者の特徴として表面的・活動的な楽しさを求めること、「気遣い」を指向する者の特徴として自己防衛的な関わりや気を遣いながら関わることを明らかにしている。よって S・A 傾向群では、自己防衛をしたり気を遣ったりしながら友人と関わること、友人関係が表面的なものである可能性が示唆された。

葛藤群：動機づけ喪失志向性が低く、自尊感情が低い

葛藤群では他の群に比べて「気遣い」が有意に高く、「内面的関係」と「群れ」が有意に低いことが明らかになった。「気遣い」関係をとる者の特徴として、互いに気を遣うといった自己防衛的な関係やお互いの内面に踏み込まないように気を遣いながら関わる関係があげられていることから（岡田, 2002）、この群では、友人と関わる場合に気を遣っていることが考えられる。

5. ま と め

本研究では動機づけ喪失志向性と自尊感情の2軸で生じる4類型を基本的な枠組みとして、そこに表れる S・A 傾向者と抑うつ傾向者に見られる差異を、友人との関わり方から検討することを目的とした。その結果、S・A 傾向群と抑うつ傾向群では、友人との関わり方に違いが見られた。

まず S・A 傾向者がいると考えられる S・A 傾向群では、友人と関わってはいるものの、関わり方が表面的な関係にとどまっており、自分の内面を開示するような関わりがなされていない可能性が示唆された。また抑うつ傾向者がいると考えられる抑うつ傾向群では、友人との関わり自体が乏しく、大学内で孤立している状態であることが示唆された。聞き取り調査で明らかにされている S・A の状態像は、軽いノリの人間関係を求め、他者と悩みを共有することを避ける傾向をもつことであるが（下山, 1997）、本研究の S・A 傾向群でもそのような特徴がみられたといえる。また抑うつの状態像は、全般的に無気力なこと（笠原, 2002）、対人関係に深く悩んでいることから（堀井・小川, 1997）、対人関係において消極的であることが予想されるが、抑うつ傾向群でも同様の特徴がみられたといえる。よって、聞き取り調査で得られている S・A および抑うつ者と、S・A 傾向や抑うつ傾向の大学生の特徴が似ていることが明らかになったといえるであろう。

6. 今後の課題

S・A は、悩めないということが問題であるため、大学の学生相談室に自主来談することが少なく、事例が少ない（下山, 1997）。しかし、無気力な大学生の中には S・A がいると考えられることから（笠原, 2002）、本研究において S・A 傾向の大学生がどのような特徴を持っているのかを明らかにした

点は意義があるものと思われる。

今後の課題としては、S・Aを正確に抽出することである。本研究でS・A傾向群とした群には、S・Aだけでなく、回避性パーソナリティ障害の疑いがある者も含まれている可能性があるため、今後はS・Aと回避性パーソナリティ障害を区別した上で、S・Aのもつ特徴を調べる必要がある。回避性パーソナリティ障害は、パーソナリティ障害の一つで、批判や拒絶、屈辱を受ける可能性にひどく敏感であるため、確実に自分が好かれるであろうと思えなければ他者と関係を持つことを渋るような人々に適用される（下山・丹野，2002）。つまり回避性パーソナリティ障害も、傷つけられることを恐れるあまり、対人関係に過敏なところがあるため、その反動として表面的な人間関係を求めることが考えられる。このように、S・Aと回避性パーソナリティ障害が、友人との関わり方において同様の反応をすることが考えられるのは、これらの概念が極めて似ているからである。実際、下山・丹野（2002）は、アパシー性パーソナリティ障害の判断基準として、（3）他者から不適応を批判や非難されることに対して強い恐怖心や警戒心を持つや（4）不適応があからさまになる場面を選択的に回避するなど、回避性パーソナリティ障害の判断基準をいくつか適応しており、S・Aと回避性パーソナリティ障害の概念が似ていることが分かる。今後は、S・Aと回避性パーソナリティの違いを精査することが求められているといえるであろう。

参考文献

- Beck, A.T. 1976 *Cognitive therapy and the emotional disorder*. New York: International Universities Press.
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. 1985 The general causality orientations scale: Self-determination in personality. *Journal of Research in Personality*, 19, 109-134.
- 堀井俊章・小川捷之 1997 対人恐怖の心性尺度の作成（続報） 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315.
- 笠原嘉 1983 不安・ゆううつ・無気力—正常と異常の境目— 飯田真ほか（編）講座精神の科学3 精神の危機 岩波書店
- 笠原嘉 2002 アパシー・シンドローム 岩波書店
- 松井豊 1990 友人関係の機能「青年期における友人関係」斎藤耕二・菊池章夫（編著）社会科の心理学ハンドブック 川島書店
- McFarland, C., and Ross, M. 1982 Impact of causal attributions on affective reactions to stress and failure. *Journal of personality and Social Psychology* 43: 937-946.
- 宮田加久子 1991 無気力のメカニズム—その予防と克服のために— 誠信書房
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 岡田努 2002 現代大学生の「ふれあい恐怖の心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10 (2), 69-84.
- 岡田努 2007 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15 (2), 135-148.
- Rosenberg, M 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 齋藤憲司 2005 大学生の無気力 シリーズ荒れる青少年の心 無気力な青少年の心—無力感の心理— 大芦

治・鎌原雅彦編著

桜井茂男 1995 「無気力」の教育社会心理学—無気力の発生するメカニズムを探る— 風間書房

Seligman, M.E.P. 1975 Helplessness — On depression, development, and death —.

鹿内啓子 1978 成功・失敗の原因帰属に及ぼす Self-esteem の影響 実験社会心理学研究, 18 (1), 35-46.

下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際—スチューデント・アパシー研究を例として 東京大学出版

下山晴彦・丹野義彦（編）2002 講座臨床心理学4 異常心理学Ⅱ 東京大学出版会

鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, 41, 200-208.

文部科学省 2008 平成 20 年度学校基本調査速報

Waterman, A.S. 1993 Developmental perspectives on identity formation: From adolescence to adulthood. In J.E. Marcia, A.S. Waterman, D.R. Matterson, S.L. Archer, & J.L. Orlofsky, (Eds.), *Ego identity: a handbook for psycho-social research*. New York: Springer-Verlag.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の処側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.